平安神宮の水と池

平安神宮にある庭園では、水が中心的な役割を果たしています。東神苑の栖鳳池は、最も大きく、琵琶湖疏水の水が一番最初に満たす池です。栖鳳池の水は、中神苑の蒼龍池へと流れ込み、その後、西神苑、南神苑へと流れていきます。

平安神宮の庭園の水は、時には美的要素として、また時には実用的な意図を持つなど様々な役割を果たしています。池が光を反射することにより、庭園をより大きく、明るく見せる効果があります。また、火災が発生した際の水源としても機能します。水面は鏡のような役割を果たし、周囲の景色をより際立たせます。流れる小川は、穏やかなせせらぎを奏で、平安神宮の東側から流れる水は、順路に逆らうよう半時計回りに設計されています。神苑の入り口は平安神宮の西側にあり、順路は時計回りになっています。水の流れに逆らって進むことで、急がずにとゆったりとしたペースで周囲を楽しんでもらえるよう意図的に設計されたものです。

琵琶湖疏水から引かれた水は、平安神宮の南東に位置する、この小石が敷かれた水路を通って、神苑へと流れていきます。琵琶湖疏水の建設は最大規模の土木事業プロジェクトであり、東京に首都が移った 1868 年以降に行われた京都の産業を促進する取り組みの一環でした。琵琶湖疏水は、近隣の滋賀県にある琵琶湖から京都へ水を引くため、1885 年から 1912 年にかけて二段階に分けて建設されました。第一段階は、1890 年に完成しました。琵琶湖疏水の完成により、京都の様々な地域で美しい庭園が作られ、その中のいくつかは、革新的な設計が施されています。